

2022年7月16日(土) ~ 9月25日(日)
町田市立国際版画美術館

第1章 日本時代 文芸雑誌『仮面』の画家 1913 - 1918

長谷川潔が版画の制作を始めたのは1912年(明治45)でした。水彩やパステルで描いた原画そのままの複製的版画を批判し、オリジナル性の高い版画の制作を目指して「創作版画」が登場(1904・明治37)して間もない頃のことです。当時、創作版画は美術における新しい表現形式として若い美術家らの注目を集めていました。

創作版画への関心を示した長谷川は、日夏耿之介(1890-1971)ら文学者が1913年(大正2)に創刊した文芸雑誌『聖盃』(2巻7号から『仮面』と改題)の同人となり、表紙や口絵、カットの制作を木版画で手がけるようになります。さらに版画家の永瀬義郎(1891-1987)、日本画家の広島新太郎(1889-1951)とともに「日本版画倶楽部」を結成して活動しました。

当時の作品の特徴は、生命観を表すために主に裸婦とダンスをテーマに制作していること、そして、それらを西洋の世紀末芸術からの刺激によって耽美的、神秘的に表現していることです。その傾向は渡仏後にも継承されていきました。

第2章 フランスで銅版画家として立つ 1919-1941

長谷川潔は第一次世界大戦が終わるのを切望し、一日も早く渡仏してルドン(画家、1840-1916)を訪ねたいと考えていました。ルドンは1916年に没したためにその願いは叶えられませんでした。長谷川は大戦終結直後の1918年12月にフランスを目指して日本を立ちます。以後、一度も帰国することなく、パリを中心にフランスで銅版画家として活動しました。

渡仏後の長谷川がはじめに制作した作品の多くは、最初に住んだ南仏などで見かけた、幾何学的なマッス(塊)の建築物が集合する古村などの風景画です。さらに、ルネサンス絵画のヴィーナスを彷彿とさせる、均整のとれた神話的な女性像です。その後1930年代に入ると、長谷川は机上のコップや花瓶に挿した草花を中心とする静物画を多く制作するようになります。当時はまだ、採取してきた枯れ草や草花を一本一本観察し、リズム感や装飾性を加味しながらもそれらをそのまま描いています。

また、長谷川潔は、1922年頃に、古典的銅版画技法であるメゾチント(フランス語: マニエール・ノワール)を研究し始め、ベルソールを用いて画面全体に微細な点を刻むそれまでの技法ではなく、上下左右斜めに交差する線で下地をつくるという、独自のメゾチント技法を考案しています。

第3章 仏訳『竹取物語』1934(1933)

長谷川潔は日本時代から渡仏直後にかけて、日夏耿之介や堀口大學(1892-1981)などの詩人らと挿絵本の制作に取り組んでいました。1934年刊行のフランス語に訳された『竹取物語』は、長谷川がこれまでで最も制作に時間をかけ、各章の書き出しの文字図案、用紙や活字、刷り(印刷)、製本などにも粉骨砕身した完成度の高い挿絵本です。まさに「リーヴル・ダール(本の美術)」と呼ぶにふさわしい、近代挿絵本の傑作といえるでしょう。最初1920年代はじめにイルソム書店から刊行される予定でしたが、その後愛書家が集まる会員組織の出版協会である「リーヴル・ダール協会」が刊行することとなり、そこから7年が費やされて刊行されました。

本の構成は、扉、口絵、物語と組み合わせられた多数の小サイズの挿絵、本の右ページに大きく刷られた15点の挿絵からなります。挿絵は全てエングレーヴィングで制作され、凜として気品のある仕上がりを見せています。フランス語への翻訳はパリの日本大使館勤務だった外交官・本野盛一が行い、仏訳の物語と長谷川の挿絵が共鳴

する、日本の伝統性と西洋文化の融合が見られる本となっています。

本展には、リーヴル・ダール協会の一般会員用に出版された普通版に加えて、会員中特に美術愛好家のために制作された特別版も出品しています。特別版にはスイットと呼ばれる長谷川の署名・落款入りの15点の挿絵や、一般会員版の挿絵に動物や昆虫などを描き加えた別ヴァージョンの刷り23点などが収められています。

第4章 日常にひそむ神秘 1941-1950年代末

長谷川潔は第二次世界大戦中もフランスに留まり、物心両面で追い込まれる中で創作活動をつづけました。そしてその時期に、いつも見る一本の樹が不意に人間と同等に見えるようになり、万物は同じだと気づき、自分の絵も変わった、といいます。それは、目に見える日常の光景を描きながら、以前にも増して見えない世界を表そうとする意識が強くなったことを意味しています。1940年代以降にくり返し描かれる樹木やコップに挿した枯れ草、窓辺などの作品は、単に形や構成の美しさを描いたものではなく、まさに日常にひそむ神秘を表現し、身の回りの深遠な世界のひろがりや示唆する風景画や静物画であるといえるでしょう。長谷川はそのような作品の創造を、一木一草という「物」より入ってその「神」にいたる、ということばで言い表しています。また、自身が最も刺激を受けたルドンが、物を暗がりの中に置いて神秘を描き出したことに触れ、「私は白日の下に置いて打眺め、そこに限りない神秘を見出す」と述べ、明るい光の下に神秘を銅版画に表していることを表明しています。

技法的にはエングレーヴィングで制作した銅版画が増加し、技術的にも冴えが見られます。そのなかでも1950年代のコップに挿した野草を刻んだ作品は、硬質で厳格、客観的といったこの技法の特質によって、特に緊張感のある画面が創造されています。

第5章 精神の高みへ ―「マニエール・ノワール」の静物画 1950年代末~1969

長谷川潔は1950年代末から60年代末まで、かつて制作した上下左右斜めに交差する線で下地をつくるメゾチント(マニエール・ノワール)とは異なり、細粒な点刻で下地をつくり、漆黒のなかからモチーフを白く浮かび上がらせる、まさに「マニエール・ノワール」(黒の技法)の名にふさわしい静物画を多数制作しました。そのような作品制作は、子どものときに、墨地に白文字の拓本を見本にして書道を学んだためでもあったようです。

この時期の「マニエール・ノワール」作品の多くは、長谷川が自身の思想から独自に意味を付したオブジェや草花、小鳥などで構成されたものです。安定した画面構成であることや崇高な精神性が感じられることなどから、それらは長谷川の表現世界の到達点として位置づけられています。

画面内のモチーフについては、長谷川によって、例えば小鳥は精神あるいは自分自身、水は生、魚は物質、球体は世界、円環は個々の人間の業績の大きさ、チェスの駒は階級、木蔭は誠実などの意味が付されています。それらによって構成された「マニエール・ノワール」の静物画は、年齢を超えた長谷川自身の、人生の寓意画とみなすことができるでしょう。

この時期長谷川は、種草や樹木や胡蝶や小鳥、玻璃球など自分が今描いているものになり切り、いつしか一切を忘れて感激すると書いています。「マニエール・ノワール」の静物画は、こうした至高の精神的境地で制作された作品なのです。

第6章 エピローグ

1971年に年齢80を迎えた長谷川潔は、その年制作した《水浴の少女》(no. 161)を最後に、版画の制作に終止符を打っています。その前年に制作した《横顔》(no. 160)は、「マニエール・ノワール」による静物画の制作が多い晩年の仕事のなかではいささか異質に見

え、これまでも制作の意図や作品の意味について推察されてきました。その謎が解けたわけではありませんが、この作品は西洋の技法である「マニエール・ノワール」を使い、東洋的な漆黒のなかにチャイナドレスの西洋人女性を浮かび上がらせていることから、フランスに長年住みつけた東洋人である長谷川潔のアイデンティティが現れた作品であるように思われます。

また、1963年出版の『長谷川潔の肖像』（nos. 157-1~157-6）は、1920年代に描かれた金魚鉢のなかの小鳥、戦時下の苦難のなかで万物は同じだと気づききっかけとなった一本の樹、そして1950年代末から集中して取り組んだ「マニエール・ノワール」による静物画などを再び制作して挿入した版画集で、長谷川の画業の縮図となるようにつくられています。

戦争の苦悩を乗り越えて60年間余りをフランスで生き、自己の思想に沿って崇高な精神的世界を創造した長谷川潔。私たちが作品から受け取ることができるものは多いのではないのでしょうか。

コラム 1

『仮面』および日本版画倶楽部の版画仲間

青年時代の長谷川は、1913年（大正2）創刊の文芸美術雑誌『聖盃』（2巻7号から『仮面』と改題）の同人となり、表紙や口絵、カットの制作を手がけました。その時の仲間に版画家の永瀬義郎がいました。永瀬もまた、長谷川同様に生命観を表す裸婦やダンスの作品を多く制作していますが、『サロメ』（no. 21-2）のように、エロスへの関心を強く表わしていることが特徴です。また長谷川は、1916年（大正5）に永瀬、広島新太郎とともに、日本ではじめての版画団体である「日本版画倶楽部」を結成し、展覧会を開催しています。その頃の広島は「赤い光の中に黒い猪が歩いている」とか、「裸体の女が青い猫の首をしめて立っている」などといった怪異な作品を制作していました。本展出品作品は、1920年前後の制作で、哀愁と神秘が感じられる内容となっています。

コラム 2

萩原朔太郎詩集『月に吠える』への共感

長谷川潔は、大正期発行の文芸同人誌『感情』（1917年5月）に、「詩集『月に吠える』の装幀に就いて」を掲載しています。『月に吠える』は詩人萩原朔太郎の第一詩集で、口語による象徴詩、抒情詩の領域を開拓した新傾向の詩集と文学史に位置付けられています。刊行時には恩地孝四郎と田中恭吉による装幀と挿絵を含む、本自体の魅力も反響を呼びました。長谷川はこの詩集について、魂を揺さぶる鋭い感覚による詩と挿絵が融合し、輝いていると評しています。

長谷川は恩地と田中の作品を版画誌『月映』を通じて知っていました。この『月映』は、田中、恩地、藤森静雄によって、1914年から15年にかけて全7輯公刊された版画誌です。このうち田中は、公刊時には既に結核に侵され、終刊号となった第7輯刊行前に亡くなっています。長谷川は特にこの恭吉の作品に肉体的苦悩から来る焦りと嘆きを見出し、絶えざる死の幻影におびやかされ、震えていた若き芸術家の短い生涯に深く考えさせられると記しています。

コラム 3

青年時代の刺激

長谷川潔は「ブレイクとムンクとルドンの芸術は、青年時代の自分に強い刺激を与えた」と記しています。その理由は、彼らが「神秘的光景」を描くことによって「神秘的感情」を表現しているからだとしています。

なかでもルドンは、最も自作を見てもらいたかった画家でした。実際の制作の上でも、ルドンが描いた、花瓶に挿した草花や窓辺風景、樹木など、同じモチーフを版画で表しています。ただし物を暗がりの中に置いて神秘的な光景を描いたルドンに対して、長谷川は白日のなかの神秘を見出し、表現するという態度で制作に臨んでいました。

また彼は、ルドンの師であるロドルフ・プレスダンの作品を所蔵し、「本当のエリートしか判らない芸術」と示唆的なことばを残しています。

コラム 4

エングレーヴィングという超絶技巧

エングレーヴィングは、ピュランという道具で銅板の表面に細い線を刻んで絵を描いていく技法で、15世紀前半にヨーロッパで生まれました。習得が難しく制作にも時間を要する、いわゆる超絶技巧です。

長谷川潔は1925年からこの技法による銅版画を制作し始め、1930年代から50年代にかけて精力を傾けています。中でもグラスに挿したさまざまな野草を刻んだ一群の作品は、この技法による長谷川作品の代表的作例といえます。

本コーナーではエングレーヴィングで制作された西洋の古典作品を紹介します。アルブレヒト・デューラー（1471-1528）は、エングレーヴィングの歴史に最初に登場するドイツの画家・版画家のマルティン・ショングアアー（1450頃-1491）を規範として、新しい人体表現や三次元的空間表現を打ち立てた、ドイツを代表する画家・版画家です。ヘンドリック・ホルツィウス（1558-1617）はネーデルラントの画家・版画家で、線の始まりと終わりが細くなり途中が太くなる刻線を特徴とするエングレーヴィングを制作しました。クロード・メラン（1598-1688）は平行線のエングレーヴィングによって量感や質感を表現したフランスの版画家です。アントワーヌ・マッソン（1636-1700）はフランスの版画家で、毛髪や衣服の再現性に高い力量を見せる作品を制作しました。

長谷川はこうした作品を見て、エングレーヴィングの技術を磨いたと考えられます。

コラム 5

メゾチント技法の作品を比較する

メゾチントはベルソーという先端に楕円のような細かい刃のついた道具で版の表面に微細な点状の傷をつける銅版画技法です。17世紀にドイツ人が発明し、18世紀中頃まで、油彩画などを複製する方法としてイギリスとオランダで流行しました。特にイギリスでは油彩画の肖像画を版画化するために頻繁に使われました。ピーター・シェンク（1660-1711）はその時代のオランダの版画家で、700点以上ものメゾチント作品を制作したといわれます。その後19世紀初めに、イギリスの画家・版画家のジョン・マーティン（1789-1854）が、メゾチントによって闇の世界を思わせる幻想的世界を描き出し、この技法の魅力を十二分に伝えました。しかしこれ以後、メゾチントはリトグラフなどの新しい技法の登場により衰退してしまいます。

長谷川はこの過去のものとなった技法に着目し、最初、上下左右、斜めに無数の細い線を刻んで下地を作り、黒いインクで刷るという独自の方法で制作し、西洋の古典技法であるこのメゾチントを現代の芸術表現のひとつとして復活させました。その後、密度の高い微細な点刻をほどこすことで、漆黒から浮かび上がる深遠な表現世界を創り出しました。長谷川はそのような自作を、あえて「黒の手法」という意味のフランス語で、「マニエール・ノワール」と呼んでいました。

浜口陽三（1909-2000）もまた、20世紀に、メゾチントによって新しい表現を開拓した版画家でした。しかし長谷川とは異なり、3原色と黒を刷り重ねた多色刷りのメゾチント作品を制作しました。

コラム 6

フランスの友人画家たち

長谷川潔はフランスに渡った後、「直ちにデュフィ、マティス、ピカソ、スゴンザック、ヴラマンク、シャガール、ローランサン、その他大勢」と交遊したと記しています。

そのうちラウル・デュフィ（1877-1953）とは1921年にモンマルトルの画材店で知り合って以来親しく交流しました。デュフィは透明感のある色彩とリズム感のある線を特徴とする絵画を制作したフランスの画家です。木版画、銅版画、リトグラフも制作しました。長谷川は彼の勧めで1924年から「独立画家・版画家協会」展に出品しています。1935年にこのグループが解散に至った後、権威ある「フランス画家・版画家協会」の会員となり、この展覧会に出品が続けられたのもデュフィの知遇があったからでした。

アンドレ・デュノワイエ・ド・スゴンザック（1884-1974）も特に親しかった画家です。「フランス画家・版画家協会」の会員になる際には、彼の支持を得たといえます。スゴンザックは風景や裸婦を好みのある色調で重厚に描いたフランスの画家ですが、水彩画や銅版画も多数制作しました。